



Title	デンマーク語の関係節と先行詞の限定方法について
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN. 1988, 8, p. 3-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の関係節と 先行詞の限定方法について

新谷 俊裕

1. 序

「その時ももらったお金は彼はすでにつかってしまった」という和文をデンマーク語に訳す問題に対し、次のような二つの解答例が示されたとする。

(1) *De penge*, han dengang fik, har han allerede brugt.

(2) *Pengene*, han dengang fik, har han allerede brugt.

(1)と(2)の相違は、(1)は *de penge*, (2)は *pengene* といった先行詞の限定方法の相違である。すなわち、(1)では名詞 (*penge*) が先行の *de* という要素により限定されている。一方、(2)では名詞が後置された *-ne* という要素によって限定されている。これらは、限定される名詞の性・数により、それぞれ *den/det/de* と *-(e)n/-(e)t/-(e)ne* という形をとる。さて、上記の和文の訳として(1)、(2)の双方ともに正しいのであろうか。それとも、どちらか一方のみ正しいのであろうか。これらは実は Mikkelsen: 192 が示している例文であるが、彼は(1)、(2)を同義とみなしているようである。¹⁾ また、筆者が母語話者に確かめたかぎりでも、(1)、(2)は同義であると言う。つまり、(1)、(2)ともに上記の和文の正しい訳とすることが可能なようである。では、(1)の *de penge* と(2)の *pengene* といった先行詞の限定方法の相違は、文あるいは関係節の意味の相違を伴うことがけっしてないのであろうか。次の例文をしてみる。

(3) *Den syren*, vi plantede i foråret, er gået ud.

(4) *Syrenen*, vi plantede i foråret, er gået ud.²⁾

(3), (4)ともに「我々が春にライラックを植えた」ことと「そのライラックが枯れてしまった」という知的意味を表す点では同じである。しかし、デンマーク語の母語話者には(3)と(4)は多少なりとも意味が違うと思われるようである。すなわち、(3)では何本かあるライラックのうち、我々が春に植えた特定の一本のライラックについて述べているのに対し、(4)では、庭にライラックが一本だけある状況などが想像されるのである。また、「我々が春にライラックを植えた」という事実を知らない相手に、(たとえば手紙などで)「そのライラックが枯れてしまった」ことを伝えるときには、(4)を用いることはまずなく、用いるとすれば、(3)であると言う。(3), (4)の例からは、den syren と syrenen は外見上、形態が異なるのと同様、その表すところも違っているとすることができるようだ。

それでは、この点（以後 DEN/-EN 問題と便宜上呼ぶことにする）に関して諸文法書はどう扱っているのだろうか。

2. 関係節の種類

2.1. 関係節に関する諸文法書の記述

Diderichsen: 1964, Jones & Gade, Planck は外国人学習者用の文法書であるが、DEN/-EN 問題には一切触れていない。この点はデンマークの高校生向けの文法書 Karlsson も同様である。

Afzelius *et al.*: 32 には ‘De demonstrative pronominer bruges altid ved relative sætninger’ とある。これは「指示代名詞が常に関係節では用いられる」という意味であろうから、-EN 形の方は無視しており、DEN/-EN 問題を解明してはくれない。

山野辺: 123 は「関係従属文によって限定される語には常にこれらの指示代名詞が用いられる」とする。「関係従属文によって限定される」とは厳密には何を意味するのかあいまいでないこともないが、いわゆる制限的關係節のことを言っていると解することができるかも知れない。

Bredsdorff : 86 は言う :

When a noun qualified by an adjectival clause which is an integral part of the sentence, the noun is preceded by the demonstrative pronoun 'den' ('det', 'de') instead of having the enclitic article added to it:

Den mand, der ejer huset, er rejst ... *The man who owns the house has gone away.*

Bredsdorff の言う「文構成に不可欠な形容詞節」とは、挿入的でない関係節、すなわち、いわゆる制限的關係節のことを指すものと考えられる。山野辺にしろ Bredsdorff にしろ、関係節には、いわゆる制限的・非制限的の両タイプがあるということを読者が意識して読まないかぎり、誤解される恐れがなきにしもあらずであろう。³⁾

Koefoed⁴⁾と Stemann⁵⁾は、名詞に制限的關係節 (Stemann ではただ単に關係節) や、その他の限定節が後続する場合には、英語では名詞の前に定冠詞がくるが、デンマーク語では (強強勢の) 指示代名詞 den/det/de がくると言う。Koefoed では、このように制限的 (restrictive) 關係節と明記した点、上述の他の文法書よりも親切であろう。しかし、Koefoed, Stemann でも DEN/-EN 問題が意識して扱われているとは思えない。

少数ではあるが、DEN/-EN 問題を明瞭に扱っている文法書もある。Jespersen : 129ff., Diderichsen 1962 : 212, Lomholt⁶⁾である。文の意味にとって不可欠な制限的關係節のときは DEN で、不可欠ではない挿入的關係節のときは -EN であると言うのである。Jespersen にせよ Diderichsen にせよ、デンマーク語の初級学習者には必ずしもこれを読むことは要求できるものではない。また Lomholt はフランス語で書かれているので、日本のデンマーク語学習者には縁の薄いものと考えられる。したがって、本稿で DEN/-EN 問題に注意を喚起することは、少なくとも初級学習者には有益なことであろう。

2.2. Jespersen らによる関係節の分類

前節で制限的關係節とか非制限的關係節といった用語を用いたが、これらについて説明する必要がある。

Jespersen : 123ff. によれば、アジャンクト (adjunct : 付加語, 修飾語) には制限的アジャンクト (restrictive adjunct) と非制限的アジャンクト (non-restrictive adjunct) の二種類がある。前者は, a red rose の red のように, 「rose という語の適用性をバラという類全体のうちの一つの特定の小区分に限定し, 白 [い] バラや黄色いバラを除外することによって話題のバラを特殊化し規定する」⁷⁾ 機能を有する。言い換えれば, rose という語を「限定し, それが適用される対象の数を制限する」機能を有する。後者は, My dear little Ann! に見られるようなアジャンクトのことであり, 「この場合のアジャンクトは, 幾人かのアンたちの中でどのアンのことを言っているか (あるいは話しかけているか) を区別するためにではなく, 単に彼女を特徴づけるために用いられている」。したがって, 非制限的アジャンクトは「装飾的 (ornamental) アジャンクト [...] あるいは別の観点から見て挿入的 (parenthetical) アジャンクト」であるとする。

この二種のアジャンクト間の区別は Jespersen によれば, 関係節についても言える。英語では, 代名詞 who と which が制限的・非制限的關係節の両者を導くのに反し, that に導かれるか, あるいは代名詞なしの関係節は制限節だけである。

「[(5)] The soldiers *that* were brave ran forward. (兵士のうち勇敢な者は走り出た — [制限的])

[(6)] The soldiers, *who* were brave, ran forward. (兵士たちは勇敢であって, 走り出た — [非制限的])」

英語における制限的關係節と非制限的關係節の, このような差異は, デンマーク語では先行詞の冠詞によって示される, と Jespersen : 130 は言う。

関係節が制限的であるか非制限的であるかは、英語では *all*, デンマーク語では *alle* を加えてみると、その位置の相違で明白になると Jespersen は指摘し、デンマーク語の例文も示している。

「[(7)] (Alle) *de* soldater som var modige løb frem [制限的]」〈勇敢な兵士たちは(みんな)走り出た〉

「[(8)] *Soldaterne*, som (alle) var modige, løb frem [非制限的]」〈兵士たちは,(みんな)勇敢だったので, 走り出た〉

Jespersen はさらに言う:「しかしこの規準[先行詞の冠詞によって, 関係節の差異を示すこと]は常に適用できるのではなく, もし先行詞がもう一つ別のアジャンクトをもっていれば, 唯一の差異は前置された冠詞の強勢の有無による. すなわち,

[(9)] '*De* franske soldater som ... [制限的]

[(10)] *De* 'franske soldater, som ... [非制限的]」

Jespersen の記述のこの箇所を見てまず気づくことは, 彼の言う制限的關係節の前後にはコンマがなく, 非制限的關係節の前後にはコンマがあり, その差異は英語のそれと同様である. しかし, これは Jespersen が「ポーズのコンマ」を用いているからであり,⁸⁾ (外国人学習者がふつつ学ぶ)「文法的コンマ」を用いる場合には, 先行詞の後(関係詞の前)に必ずコンマを置くので, コンマの有無によって制限的・非制限的關係節の見分けは不可能である. またポーズのコンマを用いる場合でも, Jespersen のようには首尾一貫した原則にそっていないことが多い. したがって, コンマの有無によって関係節の性質を判断することは概して危険と言えよう.

また Jespersen は, 上で引用したように, 制限的關係節と非制限的關係節とは「先行詞の冠詞によって示される」が, 「この規準は常に適用できるのではなく, もし先行詞がもう一つのアジャンクトをもっていれば, 唯一の差異は, 前置された冠詞の強勢の有無にある」とするが, この箇所は次のように修正されるべきである. すなわち, 制限的關係節の場合,

先行詞は強強勢の DEN, すなわち指示代名詞の DEN によって限定されるのに対し,⁹⁾ 非制限的關係節の場合, 先行詞は定冠詞 (弱強勢) によって限定される. ここで言う定冠詞とは, 名詞が単独で現れる場合には後置定冠詞 -EN により, 名詞に形容詞が付く場合には独立定冠詞と呼ばれる弱強勢の DEN という形態により実現されるものを言う. すなわち,

(11) ¹De soldater, som var modige, løb frem.

と

(12) Soldaterne, som var modige, løb frem.

との差異は (9a) ¹De franske soldater, som ... と (10a) De ¹franske soldater, som ... の差異と同一のものである.¹⁰⁾

さらに, Jespersen は「いわゆる連続關係節 (continuative relative clause) は, むろん非制限的である」とし, 次のような連続的關係節

「[(13)] He gave the letter to the clerk, *who then copied it.*

デンマーク語: [(14)] Han gav brevet til kontoristen, *som så skrev det av.*

(彼は手紙を書記に渡し, 書記はそれを写した)」

を次のような制限的關係節

「[(15)] He gave the letter to the clerk *who was to copy it.*

[(16)] Han gav brevet til den kontorist *som skulde skrive det av.*

(彼は手紙を, それを写すはずの書記に渡した)」

と対比している.

以上のように Jespersen は制限的關係節と非制限的關係節を区別しているが, この二区分は今までに広く認められていることである. しかし, はたしてこの二区分だけで十分であろうか.

2.3. 関係節の分類のまとめ

本稿では、関係節における先行詞の、英語では定冠詞 *the* によるような限定方法について重点的に扱う。したがって、先行詞に不定冠詞が付く関係節は簡単に触れるにとどめる。そこで、関係節を整理分類してみると、次のようになる。(この場合、関係副詞などによって表される関係節は、先行詞の限定方法に関しては、関係代名詞によって表される関係節におけるのとは何ら違うところはないので、考慮にいけない)。

(a) 制限的關係節：先行詞の意味を制限〔特定化〕するもの

(b) 非制限的關係節：単に先行詞の性状に関して割注的説明を付加するだけで、省略しても先行詞の意味には変化を来たさないもの。¹¹⁾

また、(a)は限定的 (attributive) 関係節、(b)は記述的 (descriptive) 関係節とも呼ばれる。¹²⁾ (b)はさらに、連続的 (あるいは継続的) (continuative) 関係節とも呼ばれる。¹³⁾ Diderichsen 1962: 212 は、(a)を必要あるいは制限的關係節 (*nødvendige eller bestemmende relativsætninger*) と呼び、(b)を記述的あるいは挿入的關係節 (*beskrivende eller parentetiske relativsætninger*) と呼ぶ。

(a), (b)には、その先行詞が不定であるか (すなわち、先行詞が無冠詞あるいは不定冠詞や不定代名詞などを伴っているか)、そうでないか、すなわち、定であるか、の二つの場合がある。

(a-i) 制限的關係節：先行詞 = 不定

(17) Han bor i en ejendom, der har fem etager.

〈彼は五階建てのアパートに住んでいる〉

(18) På fem minutter løste hun et problem, som jeg havde kæmpet med i to timer.

〈彼女は、私が2時間苦しんだ問題を5分で解いた〉

(a-ii) 制限的關係節：先行詞 = 定

(19) Den ejendom, som han bor i, har fem etager.

〈彼が住んでいるアパートは五階建だ〉

(20) Den å, som løber gennem Randers, er Gudenå.

〈Randers を流れている川は Gudenå だ〉

(b-i) 非制限的關係節：先行詞 = 不定¹⁴⁾

(21) Jeg foretrækker en cykel, der ikke forurener, fremfor en bil.

〈私は、自転車は汚染を起こさないし、車よりもいいと思う〉

(22) Så fik jeg en papegøje, som senere viste sig at være en undulat. 〈そこで僕はオウムをもらったが、それは後でインコであることがわかった〉

(b-ii) 非制限的關係節：先行詞 = 定

(23) Sygehuset, der begyndte den ny type prøver for et halvt år siden, ser mange fordele ved at skifte. 〈(その)病院は、半年前にその新種の検査を始めたが、新しい検査に換えると好都合なことが多々あると言っている〉(Weekendavisen, 26. marts 1986 - 3. april 1986)

(24)=(16) Han gav brevet til kontoristen, som så skrev det av.

上で触れたように、非制限的關係節は記述的關係節とも、連続的（継続的）關係節とも、挿入的關係節とも呼ばれている。そうすると、(24) はこれら四種類の名称で呼ばれることになる。しかし前節末で引用した「いわゆる連続關係節 [...] は、むしろ非制限的である」という箇所から、Jespersen は(24)のようなタイプの關係節のみを連続的關係節とみなしていることが、わかる。このタイプの關係節の特徴は、主節が關係節の前で完結しており、したがって、先行（等位）節の後にコンマを置き、關係代名詞を前方照応的人称代名詞に置き換えて、等位接続詞 *og* でつなぐことができることである。本稿では、以下このタイプの關係節のみを「連続的關係節」と呼ぶ。上の(22)も連続的關係節である。これに対し、(21)、(23)のように、關係節が文の途中で文字通り挿入されて

いる場合のみ、「挿入的關係節」と呼ぶことにする。これは、また同格的 (appositive) 關係節と呼ばれることもある。¹⁵⁾

2.4. 制限的關係節の再分類

上記の分類に対し、中島：25ff. は、非制限的關係節に関しては同様な分類をしているものの、“非制限的關係節ではない關係節”，すなわち本稿で、そして一般に制限的關係節と言っているものを二分する代わりに三分している。

(A) 新情報の先行詞＋記述的關係詞節

(25) He lives in an apartment house that is thirty stories high.¹⁶⁾

(26) She solved in five minutes a problem that I had struggled with for two hours.

(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節

(27) This is the house that Jack built.

(28) We are blessed with the sun that ripens the rice.

(C) 後方照応的先行詞＋制限的關係詞節

(29) The apartment house that he lives in is thirty stories high.

(30) The river which flows through London is the Thames.

(31) The students to whom this letter is addressed should reply in writing to the undersigned.

(C)の關係節を制限的とすることに対して反論する人はいないであろう。問題になるのは、(A)と(B)である。大塚：906 は(26)と同じ例文や(27)に類似の例文 This is the man who/that gave me this book.などを制限的關係節を含む文としている。また、前節で触れたように、記述的關係節は、非制限的關係節の別称である。つまり、非制限的關係節は、制限的關係節のように先行詞を限定するのではなく、先行詞を

挿入的（あるいは連続的）に記述する，という意味である。これは中島の言う「記述的」とは意味が異なっているようである。中島はこのことをどう説明しているのか，見てみる。

(25)の *an apartment house that is thirty stories high* という名詞句は，名詞句を文によって拡充したもので，その基底にある「構造は [*an apartment house*][*the apartment house is thirty stories high*]

であって，先行詞は不定冠詞のついた新情報の名詞で，これをうける文では不定冠詞が定冠詞に変る。これは前方照応的 (anaphoric) の *the* とよばれるものである。そしてこの [*the apartment house*] を関係代名詞 *which* (または *that*) に変えることによって先行詞と結びつけ，その記述文となっているのである。」

一方，(29)は先行詞が *the* をもつ特定のものを指している名詞の場合で，「この定冠詞は彼の住んでいるアパートに限定することを示しているので，この *the* は *apartment house* だけにつくのではなく，[*the*][*apartment house that he lives in*] と分析されるべきもので，その基底にある構造は [*the* △][*he lives in an apartment house*] と考えられる。すなわち「彼はアパートに住んでいる」「そのアパート」という制限つきの名詞で，関係詞節中にある *an apartment house* を先行詞の位置に移して，あとから先行詞ができたものである。この定冠詞は後方照応的 (cataphoric) の *the* とよばれるものである」と中島は説明する。(26)の関係節は(25)の場合と同様に記述的であり，制限的ではない。(26)を「私は問題を解くのに2時間苦しんだ」「その問題」というふうに制限的關係節を含む文にするには，*She solved in five minutes the problem that I had struggled with for two hours.* のように書き換えなければならないことは，上のことから明白である。

中島は(B)の場合についても説明している。(27)の「*the* は文脈でわかっている (anaphoric の *the*) か，眼前に見ている家かであって，はじめからわかっているものである。そのときの場面でわかっているものを

指す定冠詞を外部照応的 (exophoric) の *the* とよぶ。」(27)の「*the house* はこういう *the* をもつものであって、関係詞節は制限的なものではない。その基底にある構造は [the house][Jack built this house] というようなもので、関係詞節は記述的なものである。」(28)の場合も「*the sun* が外部照応的なものであることは明らかで、制限的關係詞節がくるはずがない。[the sun][the sun ripens the rice] ということである。」と説明している。

中島の示すこれらの説明は十分に納得のいくものである。また、中島は次のような例文を二つ挙げて、

(32) The policeman who knows the way has offered to guide us.

(33) The policeman, who knows the way, has offered to guide us.

(32)は【(C) 後方照応的先行詞＋制限的關係詞節】と解すれば「道を知っている警官が」となり、【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】と解すれば「道を知っている警官は」となると言う。一方、(33)の關係詞節は同格（すなわち挿入的）で「警官は道を知っていたので」とすることができるとしている。ところで、(32)は「道を知っている警官が」であろうと「道を知っている警官は」であろうと、【(C) 後方照応的先行詞＋制限的關係詞節】【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】のどちらの意味にでもなりえるという点で、中島の言うことは当を得ていないが、【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】である(32)(仮に(32-B)と呼ぶ)の場合と、(33)の場合と二種類の記述的な關係節が存在することは事実である。意味の上では(32-B)と(33)の違いはない（中島：35 参照）。ただ、(32-B)では先行詞と關係節の結び付きが強固であるが、(33)では關係節の独立性が強い。また、(32-B)では、話し手が情報伝達上、關係節は必要不可欠なものと考えているが、(33)では必ずしもそうではなくて、關係節は「説明的になって」付けたし的なものと考えられる。

この違いは、英語では、【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】の場合には関係詞として *that* を用いることができるということや、同格の（挿入的）関係節の前後には小休止（コンマ）が置かれることなどで、表面的にも違いがわかる。デンマーク語においても、英語と同様に【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】の存在が予想されるが、デンマーク語には、英語の *that* に相当する、同格の関係節には現れず、【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】にのみ現れる語がない。また、文法的コンマを用いる場合には、両者間の区別は書記法上は不可能である。それゆえ、デンマーク語に関しては、【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】の存在を証明することは困難かも知れない。

中島の言う【(A) 新情報の先行詞＋記述的關係詞節】と【(B) 既知の先行詞＋記述的關係詞節】は、従来の分類方法によれば、制限的關係節で、中島では制限的關係詞節ではない。従来の方法では、これはまた、非制限的（＝記述的）関係節ではないが、中島では記述的關係詞節である。矛盾である。つまり、用語の統一がなされていないからである。修正が必要である。これより本稿では、従来、制限的關係節と呼ばれていたものを「必要關係節」と呼び、従来の非制限的關係節を「付加的關係節」と呼ぶことにする。また、中島の言う「記述的」という意味で、「記述的關係節」という表現を用いることにする。また、それによって、「制限的關係節」とは、必要關係節のうちの記述的關係節ではないもののみを指すことになる。

3. 限定詞 DEN について

3.1. 先行詞の限定方法

前節では関係節の分類に関して、中島の方法を認め、従来の方法を修正する必要があるとした。前節で示した中島の方法における先行詞の種類の分類方法には、「新情報、既知」という情報・意味上の分類と、「後方照応的」という文法機能上の分類が入り混じっており、統一性に欠けている。

本稿では、先行詞を文法上の形態で分類すると、以下のようになる。

(a) 必要関係節

(i) 記述的關係節：不定の先行詞 ((17), (18); (25), (26))

(ii) 記述的關係節：前方照応・外部照応的先行詞 ((27), (28))

(iii) 制限的關係節：後方照応的先行詞 ((19), (20); (29), (30), (31))

(b) 付加的關係節

(1) 挿入的關係節

(i) 記述的關係節：不定の先行詞 (21)

(ii) 記述的關係節：前方照応・外部照応的先行詞 (23)

(2) 連続的關係節

(i) 記述的關係節：不定の先行詞 (22)

(ii) 記述的關係節：前方照応・外部照応的先行詞 (24)

不定の先行詞とは、冠詞なし、あるいは不定冠詞 *en/et* や *nogle* (= 英: *some* (+ 複数名詞)) などで始まる先行詞のことである (例文 (17), (18), (21), (22) 参照)。

後方照応的先行詞とは、それ自体では不完全な情報しか内包していなくて、限定する関係節が後方に来ることを意味している。つまり、先行詞は後方照応 (cataphoric) の限定詞によって限定されており、デンマーク語では指示代名詞の *den/det/de* が後方照応の限定詞の機能を担っている (例文 (19), (20) 参照) ことはすでに触れた。この後方照応の限定詞は、*Jeg kom til den slutning, at ...* <私は…という結論に達した> といった文中でも見られるが、この文中の *slutning* も *at* 節によって限定されているのである。

前方照応的先行詞とは、文脈の流れからすでにわかっているもので、前方照応の限定詞によって限定されているものである。外部照応的先行詞とは、*Der går en mand nede på gaden* <通りを一人の男が歩いている> の *gaden* のように、眼前に見てわかるものや、*Da jeg kom ud af*

butikken, kom der en mand løbende ned ad gaden <私がその店から出たとき、一人の男が道を走り下りてきた> の gaden のように、眼前には見ていないが、状況からわかるものなど、外部照応の限定詞によって限定されているものである。前方照応・外部照応的先行詞には固有名詞などもある。前方照応と後方照応の限定詞は、デンマーク語ではふつう定冠詞（後置定冠詞と独立定冠詞）で表される（例文(23), (24)参照）。特殊な場合には指示代名詞がこの機能を担うことがある。

3.2. DEN の決定詞 (determinativ) 的用法

前節末で「特殊な場合」としたものは、指示代名詞が、その名称が示すように、ある対象を「指し示す」場合のことである。実際に眼前にある対象を指し示す場合 — これが指示代名詞本来の用法であるが — には、指示代名詞 (den, den der; denne, denne her) は外部照応的である。また、眼前にはないが、ある対象を「想起しつつ」「指し示す」場合には、指示代名詞 (den, den der) は前方照応的である。

デンマーク語の指示代名詞 DEN (den/det/de) に関して言えば、DEN には前方照応・外部照応・後方照応の三機能があることになろうか。定冠詞 (DEN あるいは -EN) には前方照応・外部照応の二機能がある。

一方、英語の場合には、定冠詞 the に前方照応・外部照応・後方照応の三機能があり、指示代名詞の that には前方照応 <あれ>・外部照応 <それ、あれ> の二機能がある。

以上のことから、後方照応の限定詞は、デンマーク語では指示代名詞の DEN であり、英語では定冠詞の the であるという不一致が認められる。もっとも、デンマーク語と英語は同系の似通った言語であるとはいえ、詳細については異なった点があってもなんら不思議ではないのであるが、ここで見た不一致は「後方照応」という機能そのものに原因があるようである。

すでに見たように、後方照応の限定詞が名詞に付くのは、名詞に制限

的關係節や Jeg kom til den slutning, at ... に見られるような制限的 at 節（英語では I came to the conclusion that ... に見られる that 節）といった制限節が後続する場合だけである。一方、指示代名詞の付いた名詞は指示代名詞によってすでに制限されており、さらに付加語が付く場合には、その付加語は記述的なものである。同様に指示代名詞の付いた名詞に後続するのは、記述的關係節であり、制限的關係節ではない。これは、英語の that に後方照応の機能がないことによってわかる。デンマーク語の後方照応的な DEN は、本稿でもこれまでずっと指示代名詞と呼んできたが、では、一体何なのであろうか。すでに見たように、強勢が置かれる点で、独立定冠詞ではないと言える（§2.2 参照）。指示代名詞の本来的でない用法とするか、形態は指示代名詞の DEN と同じであるが、まったく別のものとするかは、スウェーデン語が参考になる。

スウェーデン語における（必要）制限的關係節と付加的（挿入的）關係節の例には次のようなものがある。

(34) Det hus som ligger på backen är rött.

= (34a) Det hus, som ligger på bakken, er rødt.

〈丘の上にある家は赤色だ〉〔制限的〕

(35) Huset som ligger på backen är rött.

= (35a) Huset, som ligger på bakken, er rødt.

〈その家は、丘の上にあるが、赤色だ〉〔付加的〕

(34)の det hus は(34a)の det hus とまったく同じように映るが、実はそうではない。デンマーク語の場合には、det hus は(34a)のように制限的關係節に後続される場合以外にも、〈あの家〉を意味する〔本来的用法の指示代名詞＋名詞〕の結合としても起こりうるが、スウェーデン語の場合には、det hus という形は制限的關係節の前でしか現れず、〈あの家〉を意味する〔本来的用法の指示代名詞＋名詞〕の結合としては現れえない。この場合にはスウェーデン語では det huset となり、

名詞が既知形でなくてはならない。この違いから、スウェーデン語文法では(34)の *det*, すなわち後方照応の *det* を決定詞 (*determinativ*) と呼び、指示代名詞 (*det huset*) の *det* と区別している。¹⁷⁾

(34), (35)の場合とは異なり、丘の上を指差し、〈あの家 — 丘の上にあるの — は赤色だ〉と言う場合には、デンマーク語では *det der hus* という意味で *det hus* と言うことが可能である。スウェーデン語ではそれに対応するものとして *det huset* が予想される。

(36) *Det huset som ligger på backen är rött.*

= (36a) *Det hus, som ligger på bakken, er rødt.*

原則としては、上記の如く(34), (35), (36)の三つのタイプが存在するはずである。しかし、Jørgensen & Svensson: 115 によると、実際には現代スウェーデン語では一般に(36)が(34)と(35)の両方の代わりに用いられているようである。つまり、決定詞と指示代名詞における名詞の限定法に融合が起こっており、*det hus/det huset* の *det huset* への一本化が起こっているのである。さらに、前方照応の定冠詞付きの *huset* も関係節の前では *det huset* にとって代わられる傾向にあると言える。

ところが、先行詞の名詞に別の付加語が付く場合には、決定詞における名詞の本来的な限定法が見られる。Jørgensen & Svensson: 115 は次の(37), (38)では、*akademiker* と *akademikerna* の部分の相違で意味の解釈が異なってくると言う：

(37) *Han angrep de svenska akademiker som var nazistsympatisörer.* 〈彼はナチのシンパであるスウェーデンの識者たちを攻撃した (スウェーデンの識者たちのうちの一部がナチのシンパだった)〉〔制限的關係節〕

に対し

(38) *Han angrep de svenska akademikerna som var nazistsympatisörer.* 〈彼はそのスウェーデンの識者たちを攻撃したが、彼らはナチのシンパだった〉〔付加的關係節〕

このように、(37)の *de svenska akademiker* は(38)の *de svenska akademikerna* という前方照応の定冠詞の付いた形と対立するが、指示代名詞の付いた形の *de svenska akademikerna* 〈あのスウェーデンの識者たち〉とも対立することは言うまでもない。デンマーク語では、後者には *de svenske akademikere* が対応し、(37)、(38)にはそれぞれ (37a)、(38a)が対応する。

(37a) Han angreb *de svenske akademikere*, som var nazist-sympatisører.

(38a) Han angreb *de svenske akademikere*, som var nazist-sympatisører.

デンマーク語では、上記の如く、三者間の区別は強強勢の位置による発音上の相違によるだけである。

スウェーデン語では、このように、決定詞の後の名詞を未知形にするか既知形にするか揺れがあるが、決定詞は指示代名詞とは基本的に区別されるべきものと言える。

デンマーク語の後方照応的 DEN は、スウェーデン語の決定詞とは異なり、外見上は本来的指示代名詞とは何ら異なるところがないので、独立させて決定詞と呼ぶ必要はないが、機能の点から見て、指示代名詞の決定詞的用法とすることができよう。

4. 関係節のチェック法

関係節にはどのような種類があるかを、これまでに見てきた。それでは、それらの種類を実際にはどうやって見分けることができるのであろうか。チェック法をいくつか挙げてみる。なお、用語は § 2.4, § 3.1 で定義し直したものに基づく。§ 2.4 末で触れたように、デンマーク語では、関係節が記述的である場合には、それが必要関係節であるか、付加的関係節であるか、判断するのは概して困難である。

チェック法 1 : 先行詞が名詞の既知形 (すなわち [名詞 + 後置定冠詞 -EN]) であれば, 関係節は記述的である.

(12) *Soldaterne*, som var modige, løb frem.

(14) Han gav brevet til *kontoristen*, som så skrev det av.

(22) *Sygehuset*, der begyndte den ny type prøver for et halvt år siden, ser mange fordele ved at skifte.

チェック法 2 : 「関係代名詞 som が関係節中で目的語であり, この関係節が制限的であれば, この som は省略することができる。」と従来言われてきたが, ここで言う「制限的」を本稿で言う制限的關係節という意味として仮に考えておく (より正確な定義は後述する).

(19) Den ejendom, som han bor i, har fem etager.

=Den ejendom, han bor i, har fem etager.

逆に, 関係節中で目的語である関係代名詞があるべき場所が空白ならば, それは som が省略されたしるしであり, その関係節は制限的である.

(40) Han prøvede at lade være med at tænke på den ferie, han ikke skulle med på. (Søeborg : 47) <彼は, 自分が一緒に行かない休暇旅行のことは考えまいとした>

チェック法 3 : 挿入的關係節は, またその名称が示す通り挿入的, すなわち情報を付け加える働きをするのであるから, 挿入的關係節は括弧に入れることができる.¹⁸⁾

(12) Soldaterne (, som var modige,) løb frem.

(22) Sygehuset (, der begyndte den ny type prøver for et halvt år siden,) ser mange fordele ved at skifte.

チェック法 4 : 挿入的關係節は同様に, たとえば for øvrigt <ところで>, jo <ご存じのように> などを挿入することができる.¹⁹⁾

(12a) Soldaterne, som for øvrigt/jo var modige, løb frem.

(22a) Sygehuset, der for øvrigt/jo begyndte den ny type prøver for et halvt år siden, ser mange fordele ved

at skifte.

チェック法 5：制限的關係節と記述的關係節を区別するには、たとえば, Jespersen が示しているように, alle を加え, その位置の相違によって見分ける方法がある (§ 2.2 参照). (9a), (10a)に alle を加えると, それぞれ次のようになる. ただし, これは先行詞が複数でなければ不可能であることは言うまでもない.

(9b) *Alle* de franske soldater, som var modige, løb frem.

(10b) De franske soldater, som *alle* var modige, løb frem.

チェック法 6：連続的關係節は, 關係代名詞を人称代名詞に置き換えて, 主節に書き換えることができる.²⁰⁾

(14) Han gav brevet til kontoristen, som så skrev det av.

→ Han gav brevet til kontoristen. Så skrev han det av.

以上, いくつかのチェック法を挙げたが, これらのチェック法を踏まえた上で, § 1 で挙げた例文を再検討してみる.

(1) De penge, han dengang fik, har han allerede brugt.

(2) Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt.

(1)はチェック法 2 が適用でき, 關係節は制限的であると判断され, 現実にもそういった意味である. ところが, (2)の關係節はチェック法 1 により記述的と判断される, しかし同時にチェック法 2 により制限的と判断される. 矛盾である. (2)は現実には(1)と同じ意味に解釈されている.

(3) Den syren, vi plantede i foråret, er gået ud.

(4) Syrenen, vi plantede i foråret, er gået ud.

(3)は(1)同様チェック法 2 により, 關係節は制限的と判断され, 現実の〈我々が春に植えたそのライラック〉という意味と合致する. (4)は(2)と同様チェック法 1, 2 により關係節は制限的と記述的の両方でありうるという矛盾したものとして判断される. 現実には, 「庭にライラックが 1 本だけある状況が想像される」ということは, 話し手と聞き手がその庭にいて, 問題のライラックを眼前にしているということであり,

syrenen という既知形は外部照応的である。また、「我々が春にライラックを植えた」という事実を知らない相手には(3)しか言えないが、その事実を知っている相手には(4)が言えるということは、その場合の syrenen という既知形は前方照応的であることを意味する。つまり、問題の関係節は記述的であり、制限的ではない。

すなわち、(2)では先行詞が既知形であるということが無視されており、関係代名詞 som が省略されていることが、関係節の性質を決定している。逆に、(4)では関係代名詞 som が省略されているということが無視されており、先行詞が既知形であるということが関係節の性質を決定している。これは矛盾であろうか、チェック法1にもチェック法2にも例外があるということであろうか。ここで、チェック法2を見直してみる。チェック法2は、従来よく言われてきたことであるが、ここで注意すべきことは、制限的という用語が、本稿でいう必要関係節の意味であることである。すなわち、チェック法2は次のように修正されなければならない：「チェック法2：関係代名詞 som が関係節中で目的語であり、この関係節が必要関係節であれば、この som は省略することができる。逆に、関係節中で目的語である関係代名詞があるべき場所が空白ならば、それは som が省略されたしるしであり、その関係節は必要関係節である」。この修正したチェック法2で(2)、(4)を再度チェックすると、(2)、(4)ともに必要関係節のうちの記述的关系節であるとなることができよう。(2)の pengene、(4)の syrenen について、聞き手がすでに知っていることが前提とされている。したがって、(1)と(2)はまったく同じ意味ではないと考えられる。(3)と(4)も同様である。

5. むすび

本稿では、Jespersen やその他の学者が従来行ってきた関係節分類法を、中島の方法を踏まえて再分類した。その結果、関係節はまず必要関係節と付加的关系節に二分される。前者には制限的关系節と記述的关系節

がある。後者は、記述的關係節しかないが、挿入的關係節と連続的關係節に二分される。このように、従来の分類に必要・記述的關係節を加えたことで、次のような文がうまく解釈できることとなった：

(41) Han kunne kun tænke på det der var sket, drømmen der var gået i opfyldelse, eller i hvert fald begyndelsen af den. (Søeborg : 28)

〈彼は起こったこと、かなえられた夢、あるいは少なくともその始めの部分しか考えられなかった〉

(41)は Søeborg の短編小説の一文であるが、drømmen der var gået i opfyldelse の先行詞の形態自体が、この關係節が記述的であって制限的ではないことを示している。内容的にも、主人公がいくつかの夢を抱いていて、そのうちの一つであるというふうには読めないのに、この關係節を制限的と解するのは無理である。また、この文を目にするまで、読者は主人公の抱いているその夢について何度となく読んでいし、その夢が実現する過程もこの文の直前に見ているので、drømmen der var gået i opfyldelse を付加的關係節と解釈して、〈その夢、それはかなえられたのだが〉とか〈その夢、それはかなえられたので〉とか〈その夢、そしてそれはかなえられた〉などとするのは、まったくナンセンスで、上のように〈かなえられた夢〉と必要・記述的關係節と解するのがもっとも自然と言えよう。

また關係節の分類に関連して、デンマーク語の DEN (den/det/de) には、〈1〉弱強勢の独立定冠詞の他に、〈2〉強強勢の指示代名詞の本来的用法と、〈3〉強強勢の指示代名詞の決定詞 (determinativ) 的用法があり、〈3〉は常に後方照応的であり、制限的關係節などの制限節の前でしか現れないことを示した。

本稿では、先行詞が 〈2〉の DEN、すなわち、本来的用法の指示代名詞 DEN に限定された場合にも触れたが、現実には本来的指示代名詞は話しことばに主に現れる。その場合には、DEN dér のほうがふつうに

用いられ、〈1〉の DEN や 〈3〉の DEN との混同は避けられるであろう。したがって、実際には前方照応・外部照応の定冠詞 (DEN/-EN) と後方照応の決定詞的 DEN の違いに注意すれば、関係節が制限的かそうでないか、すなわち記述的であるか否かを見分けることができる。しかし、記述的關係節が必要関係節か付加的關係節かを見分けるのは、som の省略によるチェック法 2 以外の場合には、文脈から判断する以外には方法がないということである。

ところで、§3.2 以降、デンマーク語における後方照応の限定詞は決定詞的用法の指示代名詞 DEN のみであるかのように扱ってきたが、実はこれは、(制限) 節が後続する場合にだけ言えることであって、bogen på bordet のように、制限的な前置詞句が後続する場合には後方照応の機能を担うのは定冠詞なのである。²¹⁾ 英語では the book on the desk と言い、the book which is on the desk から制限的關係節中の which is を取り去ったものに相当する。デンマーク語では bogen på bordet は den bog, der er på bordet から der er を取り去り、その上 den を -en に置き換えたものである。Bogen, der er på bordet では、先行詞の定冠詞は前方照応的か外部照応的で、関係節は制限的とは解せないのが原則である。しかし、時には bogen, der ... を制限的關係節を含むものとして用いる向きもあるが、これは bogen på bordet からのアナロジーであろう。

本稿では、中島の方法を採用して関係節を分類した。中島のこの方法は英語に関するものだが、新しい考えで、まだ十分には普及していない。この考えはデンマーク語に関しては、デンマーク内外でまったく知られていなかった。デンマーク語での必要・記述的關係節の存在を、本稿で十分に証明できたかどうかかわからないが、その点に注意を喚起することはできたと思う。また、先行詞の限定方法について考えたが、これはデンマーク語の文を理解する上で大切なことであるのは言うまでもない。実際、(11) De soldater, som ... も (12) Soldaterne, som ... も <勇敢な兵士たち

は…> という二重の意味がある日本語に翻訳することができ、som 以下の関係節が制限的か記述的かということを考えることもなく、あいまいに済ませてしまうことも可能なのである。本稿で触れたことを念頭に置けば、デンマーク語を日本語に翻訳する場合に少しは役立つであろう。

また、我々外国人がデンマーク語の作文をするとき、以上のことを踏まえて、関係節を制限的にしたい場合には先行詞を指示代名詞の決定詞用法の DEN で限定し、関係節を記述的にしたい場合には先行詞を定冠詞 (DEN/-EN) で限定するようにすれば、誤解されることなく、確実に自分の考えを伝えることができるであろう。(5/6 '88)

注

- (1) Mikkelsen: 192: 'Den bestemte form eller det bestemte kendeord står undertiden i stedet for det påpegende henvisningsord *den*. Dette finder især sted foran henførelsesbudsætninger, f.eks. *Pengene, han dengang fik, har han allerede brugt* (for *de penge, han dengang fik*).'
- (2) Aa. Hansen (b): 189 では *syrenen vi plantede i foråret, er gået ud* のように *syrenen* と *vi* の間にはコンマがない。また彼は、指示代名詞が既知形の代わりをすると言うが、その場合、文の意味に変化が起きるかどうかについては触れていない。
- (3) 制限的・非制限的關係節については本文 § 2, § 3 で詳しく述べる。
- (4) Koefoed: 173f.: 'Different from Engl. usage, the demonstrative pronoun (adjective) *den*, etc., instead of the definite form is used with a noun before a restrictive relative or another determinative clause: '*Den herre, (som) vi mødte, er min bror* - The gentleman whom we met; '*den morgen, (da) jeg ankom, var det snevejr*, the morning (when) I arrived it snowed.'

- (5) Stemmann : 245: 'Corresponding to substantive with definite article followed by a relative clause, at-clause [that-clause の誤り], or another determinative clause in English, Danish has a demonstrative pronoun (den [dæn'], det [de], de [di]) + substantive + clause, e.g.

Den mand, der har købt bordet, har solgt det igen
['dæn' ...] the man who bought the table has sold it again.

Jeg kom til den slutning, at ... [... 'dæn' ...] I came to
the conclusion that ...

Den dag, (da) jeg kom ['dæn' ...] the day (when) I came.

- (6) Lomholt : 69: 'Si une relative déterminative (nécessaire pour le sens de la phrase) qualifie le substantif, celui-ci est précédé du démonstratif: *den mand, som kommer i aften, er min fætter*, l'homme qui arrive ce soir est mon cousin. Si la relative n'est que parenthétique, on garde l'article postposé: *manden, som hostede, fortsatte sin tale*, l'homme, qui toussa, continua son discours.

- (7) Jespersen : 123. なお, Jespersen からの引用は半田の翻訳を用いた。ただし, 漢字は現代風に改めた。

- (8) cf. Skautrup : 79f.

- (9) cf. Koefoed : 173f., Stemmann : 245. 本稿注(4), (5) 参照。

- (10) Jespersen は, (7) (Alle) *de* soldater som ... の *de* の強勢については何ら説明を加えていないが, ここでは 'De soldater som ... の本来, 強強勢の *de* が 'Alle ,de soldater som ... のように 'alle を付加することで, 第一強勢から第二強勢に弱まっている。同様に, 先行詞を限定する指示代名詞が, 文中での位置あるいは前後に来る要素などによって, その強強勢 (第一強勢) が第二強勢に弱められることがある。

- (a) 'Det arbejde, som han har søgt, er nu ikke så let
at få.

<彼が応募した職は, そう簡単に得られるものではありません>

これに対し

- (b) Han har lige fået at vide, at han 'får ,det arbejde,
som han har søgt. <[彼は]応募していた職につけるという知ら

せを受け取ったところなの〉(Ipsen・間瀬 1985: 56f.)

Det arbejde, som han har søgt 中の指示代名詞 det は (a) では本来の強強勢を保つ位置 (この場合は、文頭?) にあるが、(b) では強強勢の får の直後に来ているので自らの強強勢が弱められているのである。このような場合には、第二強勢の存在を聴き分けるには余程熟練した耳が必要とされるであろう。

- (11) 大塚: 906f. なお、同所で示す心的挿入節 (mental parenthesis) は、先行詞の限定方法とは無関係なので、本稿では扱わない。
- (12) cf. 大塚: 359, 906f., 大塚・中島: 1029.
- (13) cf. 大塚: 302.
- (14) (a) Jeg er begyndt at læse en spændende bog, som jeg købte i går.

〈私は面白い本を読み始めたが、それは昨日買ったものだ〉

例文(a)は付加的・記述的關係節を含む文であるが、この文から spændende 〈面白い〉という形容詞を取り去ると、

(b) Jeg er begyndt at læse en bog, som jeg købte i går.

となるが、この(b)は必要・記述的關係節を含む文で、〈私は昨日買った本を読み始めた〉という意味に、デンマーク人は直感的に受け取るようである。先行詞が en spændende bog のように、すでに形容詞によって限定されている場合には、後続する關係節は付加的となり、en bog のように何ら限定する形容詞がない場合には、後続する關係節は必要關係節であるのがふつうのようである。

- (15) cf. 大塚・中島: 1031.
- (16) (25)~(31)は中島: 25ff. の示す例文である。(25)はデンマーク語の例文(17)に相当する。同様に(26)~(18), (29)~(19), (30)~(20).
- (17) cf. Nylund-Brodde & Holm: 68ff., 71f., Lindberg: 97ff., Jørgensen & Svensson: 114f. 本稿で扱う前方照応 (anaphoric), 外部照応 (exophoric), 後方照応 (cataphoric) の三機能を、Lindberg は、それぞれ anaforisk, deiktisk/utåttekande, determinativ と呼ぶ。
- (18) cf. Hansen & Haas: 34ff.
- (19) cf. Jørgensen & Svensson: 115.
- (20) cf. 大塚: 302.
- (21) cf. 大塚・中島: 315.

Relativsætninger og deres korrelaters bestemmelsesmåder i dansk

Toshihiro Shintani

Resumé

Relativsætninger plejer man stort set at inddele i 2 kategorier:

- (a) restriktiv relativsætning: som er bestemmende for korrelatets betydning.
- (b) ikke-restriktiv relativsætning: som tilføjer nogle parentetiske beskrivelser af korrelatets karakter, og som derfor kan udelades, uden at det ændrer korrelatets betydning.

Desuden gøres der bl. a. af Jespersen opmærksom på, at korrelatet i en restriktiv relativsætning bestemmes med trykstærkt *den/det/de*, og at korrelatet i en ikke-restriktiv relativsætning derimod bestemmes med en (enten enklitisk eller selvstændig) bestemt artikel:

- (1) *'De soldater, som var modige, løb frem.* [restriktiv]
- (2) *Soldaterne, som var modige, løb frem.*
[ikke-restriktiv]

Vi har nu sådanne sætninger som

- (3) *Den syren, vi plantede i foråret, er gået ud.*
- (4) *Syrenen, vi plantede i foråret, er gået ud.*

(3) og (4) siges at betyde forskelligt. Ved (3) forstår man, at der er tale om en bestemt syren ud af nogle flere, mens der ved (4) kun er tale om en bestemt syren og slet ikke om andre syrener. Med andre ord forudsættes der ved (4), at syrenen er bekendt både for taleren og modtageren. Herfra sluttes det, at relativsætningen i (3) er restriktiv eller bestemmende, og at relativsætningen i (4) er ikke-restriktiv og beskrivende. Dette synes at stemme overens med Jespersens bemærkning om korrelaternes bestemmelsesmåder. På den anden side plejer man at påstå, at en relativsætning uden relativpronomen (med udeladelse af *som*) er restriktiv. Ja, der er noget, der ikke stemmer. Det skyldes den forkerte opfattelse, at en relativsætning altid er en tilføjelse, når den er ikke-restriktiv og dermed beskrivende. Hvis man kan antage, at det relative *som* kan udelades, når en relativsætning ikke er en

parentetisk tilføjelse til korrelatets betydning, men er nærmere knyttet til sit korrelat, så kan relativsætningen i (4) forstås som beskrivende, samtidig med at den er nært knyttet til sit korrelat (nødvendig for sit korrelats betydning). Denne forklaring kan finde støtte i Nakajimas teori om relativsætninger.

Nakajima prøver i sin bog "Det engelske sprogs struktur" at inddele gruppen af såkaldte restriktive relativsætninger i 3 typer:

- (A) beskrivende relativsætning med et nyinformations-korrelat
- (B) beskrivende relativsætning med et bekendt korrelat
- (C) bestemmende relativsætning med et kataforisk korrelat
(beskrivende = deskriptiv; bestemmende = restriktiv)

I følge Nakajima kan

- (5) *The policeman who knows the way has offered to guide us.*

fortolkes enten som (C): [the Δ][one policeman knows the way] eller som (B): [the policeman][the policeman knows the way]. I (5-B) er relativsætningen nært knyttet til sit korrelat, mens relativsætningen i (6) nærmest er selvstændig:

- (6) *The policeman, who knows the way, has offered to guide us.*

I dansk svarer (5-C) til (7), mens (5-B) og (6) svarer til (8):

- (7) *Den politimand, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.*
- (8) *Politimanden, som kender vejen, har tilbudt at vise os derhen.*

På grundlag af Nakajimas teori har jeg i denne artikel modificeret den hidtidige inddeling af relativsætningerne på følgende måde:

- (a) nødvendig relativsætning
 - (i) beskrivende relativsætning med ubestemt korrelat
 - (ii) beskrivende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat
 - (iii) bestemmende relativsætning med kataforisk korrelat
- (b) tilføjende relativsætning
 - (1) indskudt relativsætning
 - (i) beskrivende relativsætning med ubestemt korrelat

- (ii) beskrivende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat
- (2) fortsættende relativsætning
 - (i) beskrivende relativsætning med ubestemt korrelat
 - (ii) beskrivende relativsætning med anaforisk/eksoforisk korrelat

I engelsk kan man skelne mellem på den ene side (a-ii) og på den anden side (b-1-ii)/(b-2-ii) ved brug af kommaer, samt eventuel brug af *that*. I dansk kan man ikke forvente noget lignende. Som skrevet er der ikke nogen synlig forskel (se (8)). I udtalen er der måske forskel i længden af pause foran relativsætning. Men i de fleste tilfælde er det konteksten, der afgør relativsætningens karakter. Og det er vanskeligt at afgøre, om det er en relativsætning af typen (a-ii) eller (b-1-ii)/(b-2-ii), man har at gøre med. Det hindrer ikke, at visse sætninger efter min opfattelse klart må henføres til typen (a-ii):

- (9) Han kunne kun tænke på [det der var sket,] drømmen der var gået i opfyldelse, [eller i hvert fald begyndelsen af den.] (Søeborg : 28)

I (9)'s kontekst kan der ikke være tale om én ud af flere drømme. Derfor kan relativsætningen ikke kaldes bestemmende. Dette stemmer med opfattelsen af, at det påpegende stedord *den/det/de* er nødvendig betingelse for en bestemmende relativsætning. Er relativsætningen da en ren tilføjelse? I dette tilfælde modificerer relativsætningen selve korrelatets indholdsmæssige karakter, så der egentlig ikke længere er tale om drøm. Relativsætningen er altså nærmere knyttet til korrelatet end en tilføjelse ville være. Relativsætningen kan dermed henføres til typen (a-ii).

Til sidst vil jeg gøre dem, der studerer dansk som fremmedsprog, opmærksom på følgende: Brug altid en bestemt artikel ved en nødvendig, bestemmende relativsætning, så man kan være sikker på ikke at blive misforstået.

参 考 文 献

(特記のないかぎり発行地は Copenhagen)

- Afzelius, Otto *et al.* 1986. *Dansk grammatik for udlændinge*, specialpædagogisk forlag (tidligere udgaver Dansk Flygtningehjælps sprogskole).
- Bredsdorff, Elias. 1958. *Danish An Elementary Grammar and Reader*. Cambridge.
- Diderichsen, Paul. 1962. *Elementær dansk grammatik*. 3. udg. — . 1964. *Essentials of Danish Grammar*.
- Hansen, Erik & Haas, Bodil. 1976. *Om pausekomma*. 1. udg., 2. opl.
- Hansen, Erik & Steensig, Harald. 1978. *Dansk er mange ting*. 1. udg., 2. opl.
- Hansen, Aage. 1967. *Moderne dansk I & II*.
- Jespersen, Otto. 半田一郎訳. 1958. 『文法の原理』. 岩波書店 (東京).
- Jones, W. Glyn & Gade, Kirsten. 1985. *Danish A Grammar*. 2. opl.
- Jørgensen, Nils & Svensson, Jan. 1986. *Nusvensk grammatik*. Malmö.
- Karlsson, Henry. 1965. *Dansk sproglære, håndbog for gymnasiet*. 2. udg.
- Koefoed, H. A. 1958. *Danish* (Teach Yourself Books). London.
- Lindberg, Ebba. 1980. *Beskrivande svensk grammatik*. Andra uppl. Stockholm.
- Lomholt, Jørgen. 1982. *Le Danois Contemporain*.
- Mikkelsen, Kr. 1911. *Dansk ordføjningslære*.
- 中島文雄. 1980. 『英語の構造』 (上). 岩波書店 (東京).
- Nylund-Brodde, Elizabeth & Holm, Britta (red.). 1975. *Deskriptiv svensk grammatik*. 4:e tryckningen, Stockholm.
- 大塚高信 (編). 1970. 『新英文法辞典』. 三省堂 (東京).
- 大塚高信・中島文雄 (監修). 1982. 『新英語学辞典』. 研究社 (東京).
- Schiøler, Else & Hansen, Ellen. 1986. *Dansk grammatik for folkeskolen*.
- Skautrup, Peter. 1968. *Det danske sprogs historie IV*.

Stemann, Ingeborg. 1969. *Danish a practical reader*. Fifth ed.
Viberg, Åke, Ballardini, Kerstin & Stjärnlöf, Sune. 1986. *Svensk
grammatik*. Stockholm.

山野辺五十鈴（編著）. 1986. 『自習デンマーク語文法』. 大学書林（東京）.

例文テキスト（上記参考文献以外）

Ipsen, Anne-Mette・間瀬英夫. 1985. 『これでいいのかな —— 中級デンマーク
語会話 —— Ⅰ』. 大学書林（東京）.

Søeborg, Finn. 1972. *Middag for to*. 2. udg. 2. opl. Rasmus Navers
Forlag.

Weekendavisen, Berlingske Aften. 26. marts 1986 - 3. april
1986.